

2014年度ランゲージラウンジ活動報告

教養教育センター ランゲージラウンジ運営委員会

1. 総括

2008年に始まったランゲージラウンジ活動は、まず語学検定試験用の問題等をそろえて学生たちが自律的に学習できる環境をつくることから始まった。現在では、英語はILSSP (Independent Language Study Support Program) を開設し、自習者自らが具体的な目標を設定し、その目標に向かって定期的にチューターと面談しながら学習するプログラムを展開し、自律学習実践の手助けを行っている。

英語以外の外国語では、言語ごとに曜日、時限を決めてネイティブスピーカーの会話実践の場、オンライン学習の学習補助の場を提供したり、日頃の学習の補足を行ったりしている。

以上のように、各外国語がそれぞれ独自の事情を考慮しておこなっている。今後は横浜キャンパスのコモンスペースの利用などもチェックし、より効率的な自律学習について適切なアドバイスを行っていくことが課題となろう。

2. 活動詳細

2.1 英語部門：高桑光徳

英語部門では、昨年度に引き続き、英語の自律学習を一学期間にわたってサポートする Independent Language Study Support Program (ILSSP) と、昼休みに英語による学術的な講義を聴講する Luncheon Lecture Series、そして TOEIC オンラインコースを主要な活動の基軸として実施した。

まず、毎年度、参加した学生から高い評価を得てきた ILSSP は、今年度も春学期と秋学期の二期にわたり実施した。毎週月曜日の 12:30-15:30 をコーディネーターの山森由美子氏 (本学非常勤講師) が担当し、毎週木曜日の 12:30-15:30 をコーディネーターの坂井誠氏 (本学非常勤講師) が担当した。各学生が設定した学習目標を達成すべく、ポートフォリオを活用して自律学習に励むことができるように学習支援を行った。学生の選抜方法は、従来通りオリエンテーションを行い、募集と選抜を行った。採用予定人数を大幅に超える多くの応募があったことから、登録希望者に英語学習に対する熱意を調査用紙に記入してもらい、その内容を勘案した上で選抜した。各学期の参加者数の詳細は表1のとおりである。

表1 ILSSP実績

実施期間	参加者数
春学期 (5月-7月)	20名 [文学部5、経済学部4、社会学部2、法学部1、国際学部6、心理学部2]
秋学期 (10月-1月)	19名 [文学部1、経済学部6、社会学部2、法学部1、国際学部7、心理学部2]

また、今年度は全5回にわたる Luncheon Lecture Series を開催した。以下の表の通り、春学期に2回、秋学期に3回開催し、両学期ともに外国人教員と日本人教員 (本学非常勤講師) による講演が行わ

れた。トピックは多岐にわたったが、講演者それぞれが入念に準備をし、更にパワーポイントを使用することで、より学生にわかりやすいものになるよう努めた。今年度は、留学のすすめと英語力の向上、特にライティングとプレゼンテーション能力の向上を図ることに重点がおかれたシリーズとなった。ひとつ問題点としてあがったのが、コンピュータの技術面である。講演中、短いビデオや音声ファイルがうまく再生されないということが頻繁に起こった。この点は次年度に向け改善していきたい。

表2 Luncheon Lecture Series 実績

	日付	タイトル	講演者	参加者数
第1回	5/28	Go Abroad!	Tsuyoshi Hasegawa (本学非常勤講師)	125名
第2回	6/30	Less than a Paper, More than a Tweet	Steve Doran (本学非常勤講師)	127名
第3回	10/20	Wolf – An Endangered Apex Predator	M. Trazi Williams (本学非常勤講師)	80名
第4回	11/10	Tips for Academic Writing	Makoto Sakai (本学非常勤講師)	55名
第5回	12/4	Fear Not Presentations	Aviva Ueno (本学非常勤講師)	57名

2.2 ドイツ語部門：吉田 真（経済学部）

2014年度ランゲージラウンジ(ドイツ語部門)は「ドイツ語deランチ」と題して、森本康裕氏(本学非常勤講師)が毎週金曜日の昼休みに行なった。毎回定期的に参加する学生の人数は年間を通して3～5名程度であった。参加者の多くはドイツ語初級を履修している1年生の学生だったが、オーストリアからの帰国子女が1名、ドイツ語を履修していない学生も2名程度参加していた。

春学期はリスニング練習を行なった。「東京外大言語モジュール」のドイツ語版を利用して、あらかじめ文章を部分的に空欄にしてテキストへと参加者に聴き取ってもらい、映像資料の中で話される重要なフレーズや単語を基礎文法を確認しつつ学んだ。秋学期には春学期の学習の発展篇として、リスニングに加えてドイツ語会話の練習を行なった。インターネットサイトSpiegel TVで閲覧できる映像資料を主に教材として利用し、さまざまなシチュエーション(挨拶、レストランでの注文、自己紹介、質問の仕方等々)を設定した上で、典型的なドイツ語の言い回しや短い文章を考え、それを表現するための練習に取り組んだ。なお、秋学期は基本的にすべてドイツ語のみで講座を行なった。

春秋両学期を通じ、授業時に学んだ基本的なドイツ語文法の復習やその応用を目標とし、参加者

のドイツ語学習へのモチベーションを高めること、なによりもドイツ語の学習を始めたばかりの学生たちが自発的に「ドイツ語で話す」勇気をもてるようになることに講座の主眼を置いた。

2.3 スペイン語部門：大森洋子

スペイン語では、ランゲージラウンジのスペースの利用、時間帯等を考慮して、自律的な学習をより効果的に行えるオンラインコース、スペイン文化センターが開設しているAVE (Aula Virtual de Español) への受講によって自律学習を促している。春学期、秋学期に25名程度受講した。この講座では、予め様々な学習教材が用意され、学習者が自由にページにアクセスして学習する方法になっている。その内容、学習者のコミュニケーション能力の向上をめざすためにこのコースを利用するためにはどうしたらよいのか。定期的にコースにアクセスさせるための工夫をどうするかなどが大きな課題である。

2.4 中国語部門：張宏波

2014年度の中国語部門「中文会話倶楽部」は、これまでと同じ曜日時間である授業期間中の毎週木曜日に横浜校舎1号館3階で開催した。昨年度に引き続いて、学生と同世代の中国人留学生に運営してもらい、日本人学習者と留学生とが<互学>を展開することで、楽しみながら中国語学習の効果を高める場となることを企図した。参加者は、平均して10人余りであった。

今年度の新たな試みとしては、中国人留学生に加え、初習中国語の学習を終えたばかりの上級生の日本人学生にも運営スタッフに加わってもらったことである。これは、前年度の参加者が次のような感想をもらっていたことを踏まえた対応である。留学生だけでは会話のレベルがやや高くなってしまふところがあり、中国語の学習を始めたばかりの1年生にとっては、よほど積極的な学生でなければ敷居が高く感じる場所があるという。そこで、中国語の入門段階の学習を終えた日本人学生に参加してもらい、中国語および日本語の会話に加わってもらうことで、それほど話せるわけではない学生が他にもいることで安心感を得られる環境作りをすることにした。上級生スタッフには、中国語の学習に熱心で積極的だった学生の中から、「会話倶楽部」に加わることで新しい何かを生み出す「触媒」となる可能性を感じさせるメンバーに声を掛けて選んだ。

また、「会話倶楽部」での交流が昼休みにとどまらない本格的な「繋がり」へと発展するケースも見られた。意気投合した留学生スタッフと日本人参加学生が、「倶楽部」の外でも語学学習をしたり日本文化の体験に出かけたりしているとの報告があった。

社会人学生や中国語を履修していない学生が頻繁に顔を出すようになったのも初めての出来事である。彼ら／彼女らは、「会話倶楽部」が留学生と日本人学生とが文字通り異文化交流する「場」であるという話を聞きつけて顔を出し、その楽しく有意義な雰囲気に魅力を感じて毎回のように参加するようになった。ランゲージラウンジを狭い意味で捉える必要がないことを感じさせる展開と

なっている。

これと関連して、中国文化に触れるイベントも行った。ランチョンレクチャーの一環として京劇役者を春秋2回にわたって招聘し、実演を通じて中国語を交えながら、中国の伝統文化の解説もしてもらった。20数名の参加者があって大変好評であった。

また、中国映画上映会も開催した。留学生同士で会話をするなかで、環境問題や消費のあり方に興味をもつ留学生が、日本人学生と一緒にこの問題を考えようとして、映画会を企画した。不要品の物々交換を通じて人生のあり方を見つめ直していく「台北カフェ・ストーリー」という映画を観た後で意見交換を行い、20名ほどが参加した。

もちろん、本来的な目的での「会話倶楽部」の活用も行われている。高校段階で入門学習を終えているため個別の対応が必要となったある学生は、会話力を高めるために「会話倶楽部」に参加するようになり、検定試験対策の学習チェックも「倶楽部」で行っている。

総じていえば、「会話倶楽部」の雰囲気により多様な学生に対応できるだけの「厚み」を備えつつあるというのが今年度の到達点だった。学生自身を中心に運営していく現在の流れは今後も尊重していきたいと考えている。

2.5 韓国語部門：金珍娥

2014年度韓国語ランゲージラウンジにおいては、横浜校舎で以下のような日程と体制で、週1回実施した：

●横浜校舎

担当講師：高槿旭（コグヌク）

実施期間：春学期 2014年4月22日～7月15日（毎週火曜日）

秋学期 2014年9月30日～12月23日、2015年1月6日～13日（毎週火曜日）

教室：明治学院大学横浜校舎 138教室

時間：12時35分～13時20分

人数：春学期 5～6人 秋学期 3人

担当講師の高槿旭先生から全体的に以下のようなことが伝えられた：

韓国のドラマとその台本を用いて、話す能力と聞き取る能力の向上を最大の目標として、進めてきた。毎回、映像と台本を用意し、最初は台本なしでドラマ（日本語の字幕付き）を見せて、その内容について話し合い、2回目からは、台本を見ながらドラマの内容を確認、台本の空所のセリフを、聞いて書く練習を中心に行った。

春学期はなるべく簡単な会話が聞き取れるように、台本を用意した。聞き取りが終わった後は、重要な語彙と文法を解説して、ペアで練習し、映像を見ながらシャドーイングを行った。秋学期は上級レベルの学生が来てくれたので、文法の解説などは最小限にして、セリフを聞き取って、話す練習を中心に行った。参加した学生は少なかったものの、韓国語のレベルの高さに感心した。